未来ノート
–202Xの君へ–

卓球
平野美宇

最初のおねだり ― 一人でやりきる ― 悔しさをバネに ― 金メダルを取る

五輪逃し 根っこから変えた

㊤今年１月の全日本選手権女子シングルスを史上最年少で優勝した平野

㊦2015年世界選手権のダブルスに出場した平野（手前）と伊藤美誠の「みうみま」ペア

成長と挫折を繰り返し、選手は強くなる。平野美宇(17)も、そうだった。

２０１４年12月にあったワールドツアー・グランドファイナルで、同じ中学2年生の伊藤美誠と組んだダブルスで最年少優勝。16年夏のリオデジャネイロ五輪代表の座も見えてきた。

だが、15年秋に発表された五輪代表候補に自分の名前はなく、伊藤が団体戦のメンバーに選ばれた。「美誠ちゃんと差がついたね」と周囲に言われた。ショックのあまり、悔しい気持ちさえ出てこなかった。「それが一番、悔しかった」

自分を根っこから変えなければ、五輪代表になれないと思った。コーチを変え、ラリーでミスの少ない安定志向の卓球から、スマッシュを連打する攻撃的な戦術を目指すことにした。毎日の生活スタイルも見直した。今までは仲の良い2、3人としか話をしなかったが、中国出身の新しいコーチに「心の狭さは、戦術の狭さにつながる」と助言され、苦手だなと思う人とも話すようになった。

試合では、なかなか結果が出なかった。「頑張っても成功が見えないから、結構、心が病んでいて、常にお菓子とかを食べちゃって……。めっちゃ太った」と当時を振り返る。16年1月の全日本選手権で準優勝になっても、心のモヤモヤは晴れなかった。

戦術を元に戻そうと思ったこともある。でも、コーチから「乗りかかった船は下りられない」と励まされ、コツコツと練習を重ねた。そして16年4月、ワールドツアーのポーランド・オープンで優勝。「初めて自分の思い描いていた卓球で結果が出た。(モヤモヤから)脱出した感じがあった」

今年1月の全日本選手権。決勝の相手は、前年と同じ日本のエース・石川佳純だった。立ち上がりから強打を続け、快勝した。「めっちゃ、うれしい」。史上最年少、16歳9カ月での優勝だった。（前田大輔）

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のＡＳＡ(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート　朝日新聞」で検索してください。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。